
熱いのが好き



タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱いのが好き

【Nコード】

N7414B

【作者名】

○

【あらすじ】

人里に下りてきた雪女の向かう先は。

冬の夕刻、小雪のちらつく街の通り。そこを2人の女性が歩いている。

「うふふ、あんこう鍋楽しみー」

「……」

にこにこと笑う女性と表情を変えずに歩く女性はある。鍋の店に向かっていた。

「どうしたの小雪？　なんか機嫌悪そうだけど」

「……雪絵、本気？」

「何が？」

「雪女のくせに鍋を食べようなんて」

この二人は雪女だった。小雪と呼ばれた女性は冷たい雰囲気をもったそれらしい美人だったが、雪絵と呼ばれた方はケタケタと笑うどうにもそれらしく見えない人物だった。

「わかんないかなあ。あの熱いものを食べる時の喜びが」

雪絵はうつとりとした顔で思い出していた。

「舌のとろけるようなビーフシチューとか」

「……実際溶けてたわね」

「ほっぺた落ちそうなラーメンとか」

「……ほっぺの溶けた穴からラーメン落ちてたわね」

「もう、小雪は感動が無いなあ」

「あんたこそ雪女のくせにどうしてそんなに情緒豊かなのよ！」

小雪は思わず叫んだ後、しまったという顔をした。雪女は氷のようになんて冷静でなくてはならない。深呼吸を何回か繰り返して平静さを取り戻す。

雪がだんだんと強くなる中、二人はある鍋の店に到着した。雪絵はこぼれんばかりの笑顔で、小雪はいつも通りの無表情で店を見た。

「じゃあ待っててね。ぱっぱと食べてくるから」

雪絵はそう言うのと店の中に入っていった。小雪は店の前の道路で雪絵が出てくるのを待つことにした。雪がまた強くなったが、雪女である小雪にとってはむしろありがたかった。

三十分もたった頃、店が騒がしくなった。様子を見に小雪が玄関に近づくと、扉が開いて雪絵が出てきた。よく見ると雪絵の左半身がどろどろに溶けてしまっている。騒がしくなったのはこれが原因のようだった。

「あんこう鍋……最高」

半分溶けてしまった雪絵の顔は確かに笑っていた。

とりあえず、早くこの場を離れないと騒ぎがますます大きくなる。小雪は逃げやすくするため吹雪を呼び、あたりを白く染めた。

「あんたいつか死ぬわよ」

小雪はあきれながら雪絵をささえて走り出した。

「大丈夫！ 世界の熱いものを食べ尽くすまで死なないから」
「せ……！」

小雪は「世界だー！」と叫びそうになるのを何とか抑えた。深呼吸をして落ち着きを取り戻し、話題を変えようと雪絵が持っている袋を見た。

「ところでそれは何よ」

「これ？ あんこう鍋お持ち帰りセット」
「まだ食うんかい！」

白く染まる街に小雪の叫びがこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7414b/>

熱いのが好き

2010年10月9日08時23分発行